

J-4 松島町名籠地区

2012年1月28日(土)、1月31日(火)

報告者名	岡田 浩樹	被調査者生年	① 56才(男)、② 生年未確認
調査者名	岡田 浩樹	被調査者属性	① 松島市役所職員をやめて4年前から蠣養殖。② 話者①の妻、名籠生まれ、育ち。子供は4人。松島市役所勤務
補助調査者	岡山 卓矢		

被災した際の状況

今年度の蠣の準備(蠣棚の下準備)がほぼ終わり、蠣処理場で作業が終わり、いよいよ解散というときに起きた。その時は堤防のところにいた。まず地震の時は地鳴りがずましく、まわり中、「ごうー」という音がした。老朽化した作業場にいたので近所のおばちゃんを連れて、蠣処理場のコンクリートの壁際に逃げた。作業場が崩れてもいのように。津波に関する言い伝えはない。自宅もかなり壊れた。塗り壁が全部落ちたし、床も抜けて、隙間だらけになった。家は倒れないだけ、半壊。

名籠では全壊の家屋はないが、津波ではなく、堤防が破れて、波が何度も入り込んできて全壊状況になった家がある。ただし、これは地震のための全壊とは言えない。堤防はまだ破れたまま、すごい勢いで水が流れ込んできて、また潮の満ち引きで出入りするので、ゆっくりだめになっていく。津波と言うより、その後の地盤沈下の方が問題である。

奥さんは市役所で勤務中で、そのまま市役所の3階に泊まった。川が増水してすごい流れで逆流している様子が見えた。携帯も通じないので、心配になっても、もう家は流されたと思い心配になって無理に戻った。堤防の所から流れ込んできた海水で車が動かなくなった。村人は村の入り口の公会堂に40名近く逃げ込んだ。昼は家に帰り、夜は公会堂で寝泊まりした。この村自体には被害者はいなかったが、親戚がやられた人が結構いる。

震災前は蠣棚が30棚ほどあった。震災の時は蠣の収穫が終わり、蠣棚の準備が終わったところ。自分は4日前に900本の刺し竹をしたところだった。この付近は堤防は3m12cmだけ、その堤防を越えて津波はこなかった。ただし作業場は地震で壊れた。地盤沈下が60cmほどで、それが深刻。刺し竹が根元から折れてしまっていた。海底には10cmほど刺してあるのだが、泥と水の境目で折れてしまった。それくらい水の勢いが強かったようだ。船は流されて、見つかったのだけけどエンジンがなくなった。今、漁業を続けるかどうかまよっている。父親(80歳)はまだ元気で、息子が蠣養殖を継ぐ気になったところで今回の震災があり、お金の問題よりも、自分としては氣力がわからない。息子に継がせると言っても、強く勧めることができる仕事ではない。

海底のヘドロはほとんどなくなったところ(比較的深い所)もあったが、逆に松島の海底そのものが沈下しているのでは。今までの竹ではもう短い。このため、蠣棚の場所もどこがいいかわからなくなり、漁場の配分も一から考え直さなくてはならないだろう。まだ海底にがれき(ほと

んどは他所から流れてきた)があって、船を怖くて走らすことができないので神経を使う。

作った仮殖棚(堤防のすぐそば)はすべてやられた。蠣には保険がない。田んぼには保証があるが海にはなにもない。今回は蠣の棚はたっていたが、蠣を植え付けたのではないで、保証がない。もし植えていたら、5年間の売り上げから保証金が出るのだが、仮殖棚には出ない。

蠣にはロープが巻き付いているので、竹と分けて、竹だけ燃やさないといけなく、その手間も大きい。瓦礫は野蒜の方からきたものが多いようだ。

この付近は浅蜆の産地だったが衰えた。30年前くらいから蠣の殻を粉碎したものを海にいれ、稚貝を知多半島から買ってきて入れて少しずつ増やしてきた。それも今回の津波で全部流された。

蠣の棚

この付近の蠣は1年サイクル(広島は2年サイクル)。

1間に31本刺し竹、左右に渡して62本、その間に渡し竹、これに1間に5本30本吊す、600本(連)となる。これが一棚。各自の労力に応じて棚の数は異なるが、棚一つあたりに「行使料」がかかる。単位漁協にかかる。

蠣棚は2年間続けて同じ場所を使うが、3年目にくじ引きで配分する。場所によって、蠣の育ちや作業のしやすさが異なり、収入が大きく違う。この場所はこれまでの経験や実績で決まるのだが、今回の震災で、まったく1から考えねばならない。こうした培った智恵や経験の価値が失われたのも本当に痛い。

1棚をつくるには、1本800円で62本、垂木(張りこ)が300円が31本、渡し竹が1列5本の4列で20本で、ロープ、釘、穴を開ける手間作業などで15万~20万程度。

竹は近くで調達する。自分で竹を作っている人もいる。

種蠣は仮植棚で育て、その後宮戸で養生した後に9月より収穫に入る。宮戸は別の漁協の管轄なので、使用料を払う。

蠣養殖の担い手と現状

蠣養殖しているのはうちがもっとも若い方で、他はほとんど70代。村は全部で40戸で、そのうち漁業権もっているのが18戸、うち蠣をしているのが14戸。漁業をしていない家は主に農業と松島につとめに行っている。この地域は漁業と農業が半々。災害の時にはやはり政策面や組織でも農協などがあり、頼りになるが、漁協は小さい。

この付近の蠣棚は広島の方と違って、海底が浅いので、蠣棚を浮かせると言うより、海底に直接刺し竹を刺すことになる。

奥さんは松島の山の方生まれなので蠣むきはしない。主に村で、むしろ農業だけの家の奥さんなんかは手間賃稼ぎに手伝う場合もある。

蠣は仮殖棚から、沖合の方に他の漁協に借り賃を払い、育てる。9月から1月末までが蠣向き。9月までは主に農業。蠣は5ヶ月くらいしかできないので、蠣だけで食っていくことは難しい。農業やつとめと複合的にやらないと食っていけない。経営規模が小さい。年寄りが年金もらって、年金と同じくらいの稼ぎ程度でやっている年寄りがほとんど。

海苔養殖

この付近は、かつて海苔を40年前までやっていたけども、水質のせいか衰えた。この付近も含めて本場だった。ただし、海苔は細い竹を使い、本数も多い上に、人手と何よりも乾燥させる施設（昔は自然に干していた）とその運転資金がかかり、蠣よりも資金がいる。また作業も集中的にしなければならず、蠣剥きよりも海苔の方が大変。それで海苔の値段が暴落したことをきっかけに下火になった。

農業

この付近でもナガヤトイがあった（このほか農業についての聞き取り。特に椎茸栽培について）。

信仰と年中行事

この村はいくつかの寺の檀家になっている。契約講はあるが、主に葬式。そのほかに観音講（女性だけ）や馬頭講などもあるが、それは希望者だけで、村全体ではない。

八坂神社（名籠）で氏子が前日にオヨゴモリをするが、1日限り。

自分は公務員をしていたので、村の総会や祭りについては、まあ、これからやっていかねばなんないから、そういうこと祭礼については、他のよく知っている人に聞いてもらった方がよいので、次の機会に紹介する。私の知っている話はだいたいなので……まあ、これは参考程度に（本人の希望もあり、この部分は割愛する）。